巻 頭 言

松山東雲女子大学開学 30 周年記念
紀要 32 巻の発刊によせて

松山東雲女子大学
学長　高　橋　圭　三

女子教育をさらに充実へと東雲学園理事会は 1984 年に動き始めた。そして、1992 年に本学が歩み始め今年で 30 年を迎える。学園通史等には、構想段階で四年制女子大学の開設を期に、小学校や大学院も視野に女子教育一貫体制を完備した学園の夢が膨らんでいた。近年、この先達の深慮遠謀が時代の流れで具現化し始めている。1992 年は 18 歳人口がピークであった年である。まさに、開学年を境として 18 歳人口減を承知で乾坤一擲の思いで開学に踏み切ったことが推測できる。今我々に何ができるか、これからの女子教育とは何か、そして IT 技術躍進の中で望まれる女性人材とは何かを問い直す時かもしれない。

国の流れは文理融合を基に本学にも理系の情報教育の要望は強くなっている。ここ数年間、携帯端末でネットに何時でも何処でも繋がる時代になった。まるで大きな図書館を持ち歩いているようである。かつて、子の親達には多くの知識を身に付ける学習が教育であると理解されていた。ならば、携帯端末さえあれば学習・教育は必要ない。だがしかし、教育は「自ら考える」や「主体的に関わる」といった身に付けた知識の上に、否、知識量以上に個々人の前頭葉の働きに重きを置く。その前頭葉の働きは具体的経験がなければ活性化しないことは学術上証明されている。我々大学人に求められるのは、キャンパス内で得た知識や技術を地域社会の具体的場で体験し、生きた知識をもつ人材育成であると考える。更に、ダブル・エンロールメントやダブル・メジャーが一般化している。これは学生のみに限定しているのではない。現に基幹教員として複数の大学に籍を置くことも認められようとしている。研究者の知的資源をより多くの学生に提供し、多くの領域分野の異なる研究者同士が関わり、学問的・技術的な創発が可能になる。より深い専門性をより多くの学生にということかもしれない。

日夜、加速度的に有為転変する時代に我々大学人には個々の研究に裏打ちされた教育実践が求められる。幼稚園から小中高と国は幼稚園教育要領や学習指導要領に教科等の目標や教育内容を示している。しかし、大学教育においてはどうか。大学学習指導要領などと言うものは聞いたことがない。学校教育法に**大学は学術の中心として広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用能力を展開させることを目的とする**とある。内容は自由に各大学でカリキュラムを編成できる。つまり、研究のないところにシラバスはない。そしてこのシラバスは学生の学費出費に対する商品の概要であり、教育内容を示す重要事項説明書兼利用契約書である。

研究紀要に投稿された研究がシラバスに反映され建学の精神に則った女性人材育成に寄与できることを強く深く望む。最後に投稿された教員の皆様に最大の感謝を申し上げる。

松山東雲女子大学　年譜

西　暦	事　　項
1992 年	「松山東雲女子大学」開学 初代学長　岡本道雄学長就任 人文学部（人間文化学科・言語文化学科）161 名入学
1998 年	人文学部言語文化学科を国際文化学科に名称変更
1999 年	女子大学第 2 代　別府恵子学長就任 人間心理学科の新設により 3 学科体制となる
2003 年	人文学部再編により人間文化学科の名称変更
2006 年	松山東雲学園創立 120 周年
2007 年	女子大学人文学部を人文科学部とし、心理子ども学科・国際文化学科を新設
2008 年	女子大学第 3 代　磯村滋宏学長就任
2012 年	女子大学第 4 代　棟方信彦学長就任（短期大学学長兼任） 女子大学開学 20 周年
2016 年	松山東雲学園創立 130 周年 女子大学第 5 代　塩崎千枝子学長就任（短期大学学長兼任）
2019 年	女子大学第 6 代　高橋圭三学長就任（短期大学学長兼任）
2022 年	女子大学創立 30 周年

松山東雲女子大学開学 30 周年を記念し、歴代学長、歴代学科・専攻主任、本学とご縁のある先生がた、ご在職中の先生より特別寄稿をいただいた。